

「クリスマスの悲しみ」

ヨハネによる福音書 一章一〜五、九〜十四、十六〜十八節

二〇一七年も月を重ね、十二月を迎えました。そして、十二月といえばもちろん、クリスマスです。今年も、待ちに待った「クリスマス」のその月がやってきました。そこで、(変則的な扱いばかりで申し訳ないのですが) 今月はやはり(ヨハネ福音書の中から) クリスマスにちな因んだ箇所を御一緒に読みたいと思います。そして、それぞれに思いを深めつつ、御子の御降誕みこのその日を迎えられると願っています。ちなみに、今年は二十四日の日曜日が「イヴ」で、二十五日の「クリスマス」当日は月曜日となっています。

* * *

クリスマスは、私たち・人間の知る最大の、そして最高の奇跡と言えるでしょう。それは、二千年前のあの瞬間、私たちに対する神様の愛が誰にも疑う余地のない「事実」となった時でした。「真理」であること。それはたしかに、それだけでも素晴らしいものです。ですが、言葉の上だけで真理であることを超えて 実際の「事実」となるとき、物事は初めて本当に光を放ち、本物の感動を引き起こすのではないのでしょうか。「言うことはそれなりに正しい。筋の通った、もっともなものではある。けれども、口で言うだけで、現実になっていない。事実になっていない」。そのような言葉は光を放ちません。しかし、イエス・キリストの神は違いました。主イエスの神様は「私はあなた方を愛する。何にも増して愛する」と言ってくださいました。そして、そう語られたその言葉をただ単に奇麗な言葉の上だけの口約束とはせず、実際にこの私たちの所に向こうのほうから身をもつて降りてきてくださった。そして、私たちのために体ごと、その全身全霊をぶつけて生きてくださいました。そのようにして、御自身の愛を 誰にも疑うことのできない「事実」とされたのです。クリスマスとは、この「神の愛の物語」の始まりの時です。ですから、私たちはクリスマスを感謝し、心から喜び祝います。

教会は、その喜びを様々な形で表現してきました。讃美歌を歌ってクリスマスの喜びを伝え歩く「キャロリング」もそうですし、皆で食事を共にしてクリスマスの恵みを分かち合う「愛餐の時あいさん」もそうです。そして、「ろうそく」への点火。クランツと呼ばれるグリーンの輪の上に立てて火を灯ともすのが普通ですが、これもまたその一つです。輪の上には、四本のろうそく。アドヴェント(待降

節)のろうそくです。そして、その中央に一本の大きなろうそくを立てます。神の御子・キリストのろうそくです。今年は、今月(十二月)の三日から始まります。礼拝の中で一本ずつ、ろうそくに順に火を灯していきます。五本のろうそくにはそれぞれ、特別な意味が込められています。アドヴェントにはアドヴェントの、クリスマスにはクリスマスの意味合いが。それらは、言い換えれば、神様からのメッセージと一言することができます。ですから、私たちはそのメッセージの一つひとつを静かに深く受け止め、それらを大切にしていきたいと思えます。そのようにして御子の御降誕を迎えるとき、クリスマスの喜びはさらにも深まり、いつそう味わい深いものになるのではないのでしょうか。

しかしながら、喜びには時として、その裏に悲しみが伴うことがあります。そして、まさにそのとおり、喜びのクリスマスにもその裏に、私たちの思いも及ばない深い悲しみが隠されていました。その悲しみとはいったい、どんな悲しみだったのでしょうか。クリスマスに隠された「喜びの裏の悲しみ」とはたして、どんな悲しみだったのでしょうか。

アイルランド出身の作家に、オスカー・ワイルドという人がいます。十九世紀の作家で、当時はまだイギリスに属していましたが、心に残る短編や詩などを幾つも残しています。私の好きな短編に「わがままな大男」というのがありますが、なかでもよく知られているのは「幸福な王子」という童話でしょう。「幸福な・・・」の代わりに「幸福の王子」と訳されているものもありますが、御存じの方も多くおられることと思います。絵本としても繰り返し世に出され、三年前には、日本キリスト教団の出版局からすてきな装丁のものが出版されました。心にしみる、感動的な物語です。まずは、そのお話から御紹介したいと思えます。こんな童話です。

ある町の空高く、丸く高い台の上に「幸福な王子」の大きな像が立っていました。それは生前、憂いの一つもない「無憂宮」と呼ばれる宮殿に住み、涙も悲しみも知らずに外の世界の悲惨や痛みのことばっちも知ることなく生きた、一人の本当に幸せな王子の全身を黄金で覆われた記念の像でした。ですから、人々は王子のことを「幸福な王子」と呼んでいました。ところが、冬間近のある寒い夜、渡りに遅れた一羽のツバメが羽休みのために王子の足もとにちょっと立ち寄ったことから、物語が始まります。それは、幸福な王子の、幸福とは正反対の「悲しみの物語」の始まりでした。

ツバメは、疲れた羽をちょっと休めようと、王子の足もとに立ち寄りました。雲一つない、

星の輝く夜でした。「金の寢床ときてらあ」。ツバメは辺りを見回しながら、そっと独り言を言いました。が、翼の下に頭を入れようとした、ちょうどその時です。雲一つないはずの空から大粒の滴しずくが一つ、ポツンと、ツバメの頭に落ちてきたのです。「こいつは妙だ。空には、雲なんか一つもない。星がキラキラ輝いている。なのに、雨が降ってくるなんて」。ツバメは不思議に思いました。しかし、怪訝けげんに思っていると、すぐにまた、もう一滴落ちてきます。「おいおい、雨も防げないんじゃない、どんなに立派だって何の役に立っていうんだい。煙突管のいいのでも探してこなくちゃ」。ツバメはそう言って、飛び立とうとしました。ところがところが、翼を広げるか広げないうちに、なんとまたしても滴が落ちてきたのです。三度目です。のんきなツバメもさすがに、目を凝らして上を見詰めました。すると、そこにあったのは驚くような光景でした。ツバメはいつたい、何を見たのでしょうか。目に涙をいっぱい溜ためた「幸福な王子」の姿でした。涙を流して、悲しみに心を痛めている王子の姿でした。涙が黄金の頬ほおをつたって流れていました。ツバメの頭に落ちてきた滴はなんと、王子の涙だったのです。

王子は、町の様子を隅から隅まで見渡せる高いところに生まれて初めて立ちました。そしてそのとき、それまで全く知ることのなかった人々の悲しみというものを目にして、その悲しみに涙したのでした。初めに見たのは、貧しい一軒家で深い悲しみに耐えている親子でした。貧しさですっかり痩やせ衰おとろえてしまった母親と、病気に苦しむその男の子。ふたりは必死に悲しみに耐えていました。その光景を目にして、幸福な王子はいたたまれなくなりました。そこで、王子はツバメに言います。「お願いがあるんだ。一晩ひとばん、僕のところ泊まって、僕の使いになってくれないだろうか。男の子はひどくのどが渴かわいているし、母親もとっても悲しそうだから・・・」。そう言って、ツバメに頼んで、自分が手にしていた剣けんの柄えのルビーをふたりのところに届けてもらいました。

一方、町外れの屋根裏部屋には若い脚本書きがいました。お金を手にすることができず、貧しさのなか、空腹と寒さで震えていました。王子は再び、心を締めつけられるような悲しみを憶えます。そして今度は、片方の目からサファイアを取り出し、ツバメに届けてもらうのでした。

さらには、広場でマッチを売っている女の子の姿が王子の目に入りました。女の子は途方にくれていました。売り物のマッチを間違まちがって、水溜まりに落としてしまったのです。お金を持って家に帰らなければ、お父さんに殴なぐられます。その姿を目にして、王子はツバメの反

対にもかかわらず、残されたもう一方の目まで 女の子にあげてしまいます。王子は今や、目が全く見えなくなってしまいました。

がそれでも、王子はなお、町の人々の悲しみが心を捉えて放しません。王子はなおも、ツバメに頼んで、町の様子を見にいらいます。そして、その様子を知ります。町は、金持ちたちの浮かれ騒ぐ姿と、その一方で ひたすら寒さと悲しみに耐える貧しい人々の姿とで満ちている。王子はそのあり様を聞いて ついに、自分の体を覆っている純金の箔を貧しい人たちに届けてくれるようにと、ツバメに頼むのです。とうとう、幸福な王子はなんとみすばらしい「哀れな王子」に変わってしまいました。そればかりか、王子のために一日、二日と渡りを遅らせたツバメもまた、やってきた冬の雪と霜の寒さにやられ、ついに王子の足もとに落ちて死んでしまうのです。そのとき、王子の鉛の心臓がパシッと音を立てて、真つ二つに裂けました。

宝物をもらった人々は大喜びでした。でも、王子の悲しみなど、露も知らずにいた。それを知っていたのは、ただ王子自身と 王子の手伝いをしたツバメだけでした。町の人々は誰一人として、王子の悲しみなど知らずにいました。そんななか、大切な何かを語りかけるように、ツバメの口から 心に響く言葉が語られます。それは、ツバメが何の気もなしにフツと呟いた一言でした。人々のもとに王子の宝物を届けて帰ったそのとき、ツバメはこう呟いたのです。「変だなあ。ひどく寒いっていうのに、僕は今、とっても温かいんだ」

実に美しい、しかし、実に悲しい物語ではないでしょうか。そして、この童話を知って、今まさに迎えようとしているクリスマスの出来事を、そこに重ね合わせるようにして見られる方もきっと少なくないと思います。実は、この物語を紡ぎ出したワイルドは自身の内に闇を抱えたような人物で、スキャンダラスな生涯をおくった作家でもありました。ですから、ワイルドがはたしてイエス・キリストの生涯をどれだけ意識してこの童話を書いたのか、それは知る由もありません。もしかすると自らの内なる闇に反比例し、そこから逃れるようにして、逆に清らかで美しいものに憧れたのかも知れません。いずれにせよ、この物語の中に何か 光り輝くものを感じさせられるのは、はたしてこの私だけでしょうか。

クリスマスの出来事は、ヨハネの福音書の著者がいみじくも語るように、光と闇の鮮やかなコントラストを私たちの目の前に描き出してくれます。たしかに、その最も際立ったコントラストは、あの「十字架」の瞬間でした。それは、神の愛の光が人の罪の闇を包み込んでしまう、飲み込んでしまう

瞬間です。しかしながら考えてみれば、イエス様の生涯の歩みはその初めから、このコントラストの内にありました。ヨハネは言います。九節、「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」。けれども、「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」と、先立つ五節でそう語るのでした。つまり、光が闇の中に降りてきて、輝いた。だが、闇はその光を理解しなかった、というのです。だとすれば、こんなふうに見えるのではないのでしょうか。「クリスマスとは、真のいのちの光であるイエス・キリストが^{よど}澱んだ世の闇の中に降りてこられ、そしてこの私たちのただ中に立たれた、まさにその瞬間だった。なのに、闇の世はその光を理解しなかった。そのことが分からなかった」。換言すれば、この私たちのためにイエス・キリストが来てくださったのに、私たちのほうではそのことに思いも寄せず、自分に関わりのない他人事ひとじのようにしている、ということですよ。実際、ヨハネは十節、十一節でこう述べています。「言ことば〔すなわち、神の御子イエス〕は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」。この私たちの無関心や、あるいは無理解が「世の闇」ということではないのでしょうか。イエス・キリストはクリスマスこのとき、その闇のただ中に降りてこられ、そしてそこに立たれたのでした。このようにして、イエス様はその生涯の初めから、あの十字架の影を負って歩み始められました。ここに、クリスマス悲しみが隠されています。

では、幸福な王子はその後、どうなったのでしょうか。

町の人々は、みすぼらしくなった王子の像を^{あざけ}嘲って笑いました。そしてついに、王子は炉の中で溶かされ、ツバメはゴミ捨て場に投げ捨てられてしまいました。

人々の無知のなせる業です。そして、そのなか、王子の悲しみが私たちの胸を打ちます。クリスマスはこの私たちのために助け主イエス・キリストがお生まれになった、その時だと申しました。ですから、私たちはそのうれしい時を心からお祝いし、また喜びます。けれども、喜びには時として、その裏に深い悲しみの伴うことがある。しかも、私たちは往々にして、物語の町の人々と同じように、裏にあるその悲しみをどこかに置き忘れ、置き去りにしてしまうことが少なくないのではないのでしょうか。クリスマスは、この私たちにとってとはたしかに、この上もない喜びの時です。しかし、一度立ち止まって考えてみたいのです。「神様にとって、それはいったい、どうだったのだろうか」と。御自身の独り子を十字架の犠牲の死に渡す、その悶もだえるような決断の第一歩以外の何ものでもなかったのではないか。その悲しみを、この私たちが本当に知るといえることがはたしてあるのだろうか

か。そう思われるからです。

事実、十字架へと向かう生涯の最後のとき、イエス様はゲッセマネの園において、その汗が血の滴したるように落ちるほどに悲しみ悶えながら、眠ることなく必死に祈られました。なのに、そのときそこにあつたのはいったい何だったか、覚えておられるでしょうか。そのとき、イエス・キリストがそこに見られたのはいったい、何だったでしょうか。マタイ、マルコ、ルカの三福音書から分かるのは、悲しみ悶える主イエスの苦しみをよそに、一度ならず三度までも繰り返して眠りに落ちた弟子たちの姿がそれだったということ。それはほかでもない、私たち・人間の闇とでも言うべきものではないでしょうか。「イエス・キリストがどれほど悲しみ悶えていようとも、私たちはどうか、そのことに深刻には気づかないでいる。神様の、またイエス様の悲しみを全く知るといふことがはたして、この私たちにあるのだろうか。私たちは実は、弟子たちのように、クリスマスの悲しみの深さを知ることなしに、どこかでのんきに構えていることがないだろうか」と、そう思われるからです。悲しみを本当の意味で知っているのはいったい、誰なのでしょう。王子からその体を分けてもらった町の人々ですら、喜びの裏に隠された王子とツバメの悲しみは分かりませんでした。それはまさに、王子とツバメ自身にしか分からないものでした。同じように、全く同じように、クリスマスの喜びの背後にある神様と御子の悲しみの深さを完全に知ることなど、この私たちにはどだいできないのかもしれない。それが分かるのはまさに、神様とイエス・キリスト以外にはおられないのだらうと思います。悲しみは、それほどに深いのです。クリスマスとはこのように、計り知ることのできない神様の悲しみを深く、本当に深く内に秘めた喜びの時にほかなりません。クリスマスの悲しみです。

このクリスマスの悲しみを知って、私はこの年、御子の御降誕をもう一度新たに迎え直したいと思われています。申し訳ないほどの感謝をもつて、心の真ん中に、その深いところに、真まことの光であられるイエス・キリストの御降誕を迎え入れたいと思っています。

イギリスのスコットランドに暮らすロバートという人の話ですが、こんなおもしろい想い出話があります。光にまつわるお話です。

幼いときのこと、ロバートはある夜、家のベランダに出て、年老いた一人の老人が街のガス灯に一つまた一つと火を灯していくのを眺めていました。真っ暗な、真っ暗な夜の街の通りに、遠くの方から、ガス灯の火が一つずつ灯されてきます。ガス灯の火は、ロバートのいるベランダの方にしだいに近づいてきます。とそのとき、ロバートは突然、家の中に飛び込んで、母親に向かって大声で叫んだのでした。「ママ、ママ、見て、あのおじさんを。」

あのおじさんを見て！ 真っ暗な夜に、穴を開けてるんだ」

真っ暗な闇に「穴」を開ける。これこそ、二千年前の最初のクリスマス夜の夜、あのユダヤの地でイエス・キリストがなされたことではなかったでしょうか。イエス様は闇の中に、一つの輝く光の穴を開けられた。この世のどんな深い闇も決して消すことのできない、その光のきらめきを起こされたのでした。実は、「暗闇は光を理解しなかった」とある（ヨハネ福音書一章の）五節は、一つ前の口語訳では「（光はやみの中に輝いている。そして、）やみはこれに勝たなかった」と訳出されています。原語のギリシア語 *(κατέλαβεν : καταλαμβάνω)* の直説法、能動相、第二アオリスト、単数、三人称）が元々、「理解しなかった」という意味と「勝たなかった」という意味の両方の意味合いをあわせ持つていたためです。ヨハネは時に類語を互換的に用いたり、一語に二重のニュアンスを込めたりすることがありますが、ここでも、同時に二つの意味合いを持たせて福音書を記したのでした。ヨハネはそのようにして、「暗闇は光を理解しなかった」と語る一方で、同時に「やみはこれに勝たなかった」と、すなわち「闇は光に勝たなかった」とも告げます。クリスマスこの日、イエス・キリストがこの世の闇に穴を開けられました。そして、それはとりもなおさず、この私たちの内なる闇に穴を開けられたということでもあります。この時、闇が破られ、光が灯りました。それは「インマヌエル」の光です。「神、我らと共にいます」と約束してくださいる光です。私たちの内に、また私たちの間に、このインマヌエルの光が灯されたのでした。たとえ、世の闇がこれを消そうとしても、その光は一つまた一つと確かに灯されていくにちがいません。そして、神様が私たちと共におられることを、一緒にいてくださることを知らせるのです。なぜならば、ヨハネが告げるとおり、闇が光を理解しなかったとしても、闇は決して光に勝つことはないからです。このようにして 真の光が灯るとき、私たちの心はその光の主に向かつて開かれていきます。心開かれたそんな一人の人が、次のような詩をうたっています。クリステイナ・ロセッティという、イギリスの信仰詩人です。

何をあげたらいいのでしょうか。

私はとっても貧しくて、

羊飼いなら 小羊があるし、

博士さまなら 献げるものは決まってる。

でも、私だけにできること、

私の心を献げます。

御自身の愛を惜しみなく注ぐため、ただそれだけのためにこの私たちの所にまで降りてきてくださり、いのちまでも献げてくださったクリスマスの主イエス・キリスト。その主イエスの愛を感謝し、豊かにそれを頂き、そして心をお返しする。この私たちがなすべきなのは、また私たちにできるのは、そのようにして「私の心を献げる」ことではないでしょうか。そして、そのようにするとき、この私たちもまた、頂いた愛のわずかなりともを実際に生きることのできる者とされてゆく。そして、束の間の薄っぺらな喜びとは違う、深い喜びというものをそこで味わうことのできる者とされてゆくのではないのでしょうか。外の寒さにもかかわらず、あのツバメが感じることできた「不思議な温かさ」とはまさに、そのような喜びからくる温もりだったにちがいありません。クリスマスを迎えるこのとき、その同じ喜びをもってすべての交わりを豊かにしたい、豊かに満たしたい。そう祈り、願います。

「幸福な王子」の結末についてお話いたしました。最後に、王子はいつたいどうなったのでしょうか。炉の中で溶かされ、それですべてが終わってしまったのでしょうか。そうではありませんでした。

神様が一人の天使に「この町の中にあるもので一番尊いものを二つ、この私のもとに持ってくるように」とおっしゃいました。すると、天使は溶かされなかった王子の鉛の心臓とツバメの亡骸とを持って、神様のもとに戻ってきたのです。そのとき、神様はこう言われました。「おまえは、間違いなく選んできた。この小鳥には、私の楽園の庭でどこしえに美しい歌を奏でさせよう。そして、この王子には、私の黄金の町でどこしえに私を讃えさせよう。そう、私は心に決めていたのだ」

同じように、クリスマスの主イエス・キリストもまた、あの「イースター」の甦りのとき、復活の光に包まれて、父なる神の御許に戻られました。ここにおいて、クリスマスの悲しみは大いなる栄光へと変えられたのです。

今年のクリスマスは、私たちにとって何回目のクリスマスでしょうか。たとえ二十回目であろうと三十回目であろうと、あるいは五十回目、六十回目であろうと、今年もまた新たにインマヌエルの光

を心の内深くに頂きたい。そして、どのようなときにも変わることなく、神様がこの私たち一人ひとりをいとおしみ、私たちと共にいて支え導いてくださる。喜びも嘆きも、共にしてくださる。そのことを心から感謝したいと思います。そのようにして、神様の御手に包まれている平和と平安とを憶えたいと思います。クリスマスは、旧約聖書の詩編の作者が声高くうたつたように、私たちもまた「主はわたしの光、わたしの救い」（詩編二十七・一）と声を合わせてうたうときではないでしょうか。

「汝が自らの心の内に」という詩があります。十七世紀のドイツの信仰者で、アンゲルス・シレジウスという人の詩です。

キリスト、ベツレヘムにあれ給うこと 千度に及ぶとも、
キリスト、汝が心の内にあれ給わずば、
魂はなお 打ち捨てられてあり。

クリスマスが本当のクリスマスとなるのは、この詩がうたうように、クリスマスの主イエスが私たち一人ひとりの深い思いのただ中に生まれるときです。そのとき初めて、クリスマスは真実、クリスマスとなるのではないのでしょうか。さらには、クリスマスを一日だけの年中行事に終わらせることなく、御子を日ごとに内に迎えることによって、一年のすべての一日一日が十二月二十四日の「イヴ」となり、十二月二十五日の「クリスマス」となっていくのだらうと思います。ですから、そのようにして、私たちの心を丸ごとクリスマスのプレゼントとして、飼葉桶の御子イエス・キリストに献げたいと願います。それこそが本当の贈り物にちがいないと、そう信じるからです。

ああ、愛するイエス、聖なる御子。

汝れのため、我が内に聖き優しき伏せ所をつくらせ給え。

願わくは、汝れの静けき寢床とならんことを。

我が心、喜びあまりて躍らん。

我が唇、喜びあまりて、もはや抑えるを得じ。

我もまた、喜ばしき声あげ、古の上なく美しきかの子守り唄、

御使いの讚美に合わせん。

「いと高き所には栄光、御子を賜いし神にあれ。

地には喜び、新しき年にあれ」

あの有名な 宗教改革の信仰者、マルティン・ルターの歌です。

クリスマスの主よ、来りたまえ。

御子イエスよ、来りたまえ。

〔祈り〕

クリスマスの主、御子イエス・キリストの父なる神様。

二〇一七年のこの年もまた、恵みのクリスマスを迎えようとしています。私たちは今、その恵みを遠慮せず、思う存分 頂きたいと思えます。どうか、御子イエス・キリストを私たちの奥深く、思いの真ん中にお送りください。この私たちの内に、御子をもう一度 新たに生まれさせてくださいように。そして、私たちを内側から、あなたの御心を生きることのできる者としてください。

そして、祈ります。争いや災害の悲しみに打ちひしがれ、恵みのこのときにクリスマスの喜びに浸れない方々がなんと多くおられることでしょうか。その方々のもとに、あなたがどうか、私たちに増す平和と癒やしとを届けてくださいますように。

主の御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン